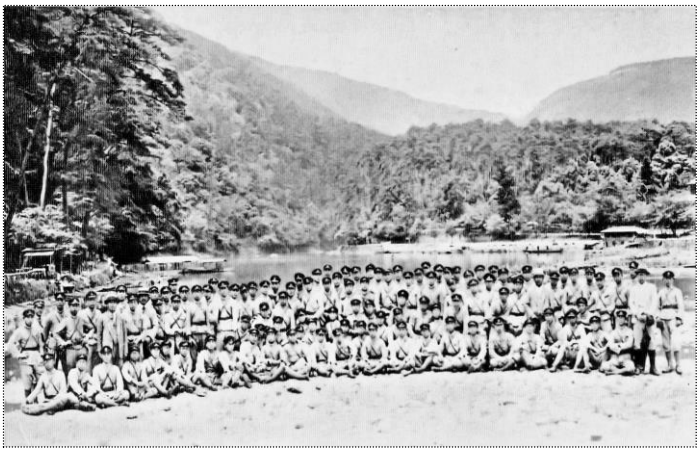
Acanthus

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

第１９９号　2026（令和８）年４月２１日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰhttp://www.sin-syu.jp/

進修同窓会 HP にアクセス



嵐山　中 39 回　1940［昭和 15］年

土浦中学校の修学旅行 12　中学校 30 回生の関西旅行　6

1930［昭和５］年６月１日から８日に掛けて実施された土浦中学 30 回生の関西旅行。今号では、６日目午後の行程とその夜の出来事とを『進修第 32 号』「関西旅行記」と『中三十回卒業五十周年記念誌』所収の中 30 回松井喜一郎「旅行記余聞」とで辿っていきます。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。

なお、引用文中の【　　】は筆者による注記です。

第六日（6月6日）午後　五年　橋爪信常

「……。嵐山温泉の付近は川幅次第に狭く流早く、青藍、暗緑の老松の間に淡紫色の岩散らばり、或は眠り、或は怒り、或は泝り【さかのぼり】、将た又【はたまた】流れ出でやうとする如き光景は筆や口はおろか、写真にすら見る事は出来まい。松の影は次第に砕け、岩には銀波をこぼすあたり、下る小舟の櫂の音や、上る引き舟(注1)の勇ましさは、保津川ならでは得られざる風情であらう。

大悲閣(注2)は嵐山の頂上とされ嵐気みちくたる小祠である。遠く見渡せば京都平野はおぼろに、眼を落せば交叉する枝々の間に一条の藍の紐がのたくつて居る。閣の鐘の音は千枝に木魂【こだま木霊・谺】し万石応へて遠く遠く山を這ひ谷を渡つて消え行き余音は一入【ひとしお】の閑静を添へて居る。此処に店を開く絵葉書屋、「丈の高い色の○い○○い洋服を着た先生は歴史を深く御存じない様ですね。」などゝ余り気持のよくない事をしやべる。山を下り再び嵐山温泉に来る。『嵐山風致国有保安林。五九・四七〇四ヘクタール。』と記した立札の傍を通り過ぎて川岸に出れば、対岸の山腹に折々列車が現はれては消えて行く。山陰本線は之であらう。此処で松岡君と香取君との操れるボートに同乗すればあたりの景色は一変して舟は滑る様に水は底まで澄み切りたゞ自然の美と雄大さとに心を奪はれるばかりである。全く嵐山の真の趣は舟の中からでなければ味はひ得られぬ。オールを抜く毎【ごと】さす毎に移り行き変り行く景色に何時か人影も少なき上流に来て仕舞つた。浮ぶ岩に舟をつなぎ、岩角に立つた時、やわらかな日の光は我等に降り注ぎ、岩は白く、山川青く、携えたカメラのシャッターの音を響かさずには居られない。

突然「アツ、カカカメ〳〵亀だ亀だ。」と松岡君の鋭い声がしたかと思ふと、既に、裸で飛び込んで仕舞つて居る、と次の瞬間、二匹の亀を両手に持つて、松岡君の顔が岩上ににこにこして居る。さすが剣道選手、電光石火の早業だ。巧妙巧妙めでたしめでたし、興に惹かれ更に上りたいのは山山であつたが悲しい哉時間が乏しい。楽しく遊びし秀麗の地を後にして去るのは何となく名残惜しいものである。今はたゞ他校生徒の乗るボートの浮ぶを見るのみとなつた。

汗を拭き〳〵駅前のベンチに腰を下すと、既に二三名の者を除いて殆ど集合して居る。他の学校の生徒も次から次と集つて来る。坂入【要之介　数学担当なので渾名が「π先生」】先生は構内の椅子に腰をかけ、テーブルにもたれて、ぐつすり寝入つて居られる。太いズボンに広い上着、鼾は百雷の如くであるが、顔も気立てもごくやさしい我等生徒の欽慕に堪へぬ先生である。丁度其の時其処に来合はせて居た女学校の旅行団体があつた。それが何故か、先生のまはりに集るは集るは、忽ち七八十人も寄りたかつてしまつた。余り大男なので珍しくて集つたのかも知れぬ。やがて騒々しさに目を覚まされると、其処に居るのは皆違つた学生ばかり、目をキヨロつかせて居られるから「イヤー、ウソーツ、ウヲー」と鬨の声【ときのこえ】やら笑ふ声やら一時に我等の雷鳴が揚つた。為に小さな電光閃く【ひらめく】嵐の山の停車場はゆるがんばかり、遠藤【川又勇三郎　理科】先生も隅の方で笑つて居られた。

午後二時此処を出発し、我等一行は【嵐山電鉄嵐山本線　現京福電気鉄道嵐山本線】京都四條大宮に向つた。下車してより南する事七八町にして真宗本派【浄土真宗本願寺派】本山西本願寺の大殿堂(注3)を得た。本堂は東西二十一間余、南北二十三間余棟の高さ十三間余とされ、ピカ〳〵光り大円柱は二かゝへもあり、仏前に跪く人々はまるで講堂内の雛人形の様である。廊下を歩けばしきりに、きゆつ、きゆつと音がする。昨日知恩院の鶯張りを聞き得なかつたから、せめて今日之でも聞いて置かう。

西本願寺の東隣は東本願寺で其の建築は更に大きく、大師堂(注4)の如きに至つては、南北三十五間、東西三十二間、棟高二十一間もある。周囲堀を繞らし、之に鯰、鯉を放ち、右方、勅使門は勅使の来る時のみ明け【開け】られる物で菊の御紋が附せられて居る。此の東本願寺は数回の火災に罹り、現今の堂宇は明治二十八年に建造したものであると言ふ。堂内には毛綱が保存され其の傍に日本文と英文との立札が立つて居る。明治十二年本堂再建の時、木材運搬に、あらゆる綱も重量に堪へずして切れたが、遂に毛髪の綱を用ひて成功したと、総数五十三房の中、二十九房は切れ、二十四房は今に残り、大なるものは長さ百三十六丈、周一尺八寸、重さ二百八十貫とは驚かざるを得ない。「毛よりも軽しと言ふが之こそ本当に毛よりも軽いな。(注5)」と片岡【保　国語】先生が笑はれた。硝子箱の中に大蛇の如く渦を巻いて居る様は寧ろ恐しい位である。

東本願寺毛綱

両本願寺の参詣を終へて、一同電車にて、途中東山七条乗換、いろは館に帰息したのがまだ午後の五時前であつた。夕食の時は、関東の荒さを示す為か皆盛に荒言葉を遣ふ。『おいこら、飯盛つてくれッ。』『おう、お前、相撲取んねぇか。』『ふざけるない。此の疲れて居るのに相撲が取れるかい。此の馬鹿野郎。』中には『ねぇさん、ご飯をつけて下さいな。』などゝやる者もある。愈々満腹になると眠むくて堪らぬ。二三十分の睡眠を取つて見たが却つて頭痛さへ加はつた。

今は宿も人少な夜の京都街からは面白さうな声が聞えて来る。旧都の名残も今夜限りと、思ひ切つて外出して見ると、東の方比叡山上には灯火点々として明滅し、鴨川の水は滾滾【こんこん】として流れ、立ちどころに頭痛は去つてしまつた。

京都の街は大阪等と違ひ、右手に笛、左手に止れ進めの札を握つた、しかめ面の交通巡査などは居ない。其上広い道路であり乍ら車馬交通の禁札の立てられてある処さへある。

京極【新京極】は東京で浅草とも言ふべき所で、数層の大百貨店、大銀行、活動写真館、芝居等のコンクリート建築が立ち並び煌煌たる電灯は白昼を欺き、街路は絶えず人の波が押し寄せて居る。

一方土産店に集つた学生連はしきりに値ぎり合ひ、他校の生徒の求めて居る品まで、まけさせて居る。『オイ、之は幾らだ。』と手に取つた京人形を店員に見せる。『一円五十銭です。』と答へれば、『ヤァ、之は高いな。少しまからないか。』などゝ盛にまけさせて居る所へ、他の学生がやつて来れば、友人でも、他人でも、知らうが知るまいが直ぐ、『ウンこれあ高い高い。確かに七十銭の掛値はしてある。八十銭に売つても五割くらゐの利益はありさうだ。どうだ俺も買ふからまけろ〳〵。』と買手に加勢する。すると店の方でも負けては居ない。『人形は土ですから原価はたゞです。八十銭に売れば八十銭の儲け、一円五十銭に売れば一円五十銭の儲けでさァ……。』しかし遂に買はぬ様子を見せれば三四十銭はきつとまけるから面白い。又中には人形の三つも毀して弁償させられる者もあれば店の真中で毀して知らぬふりをし、店の右又左を迂回して抜け出す者もある。京都の街街をぶらついて一番面白いのは之等の店の中に相違あるまい。

夜は益々深くなつて来た。

市役所付近は行き交ふ人も稀に、広い街路を折々自動車が滑り行き何となく京都の落ち着きを漂はして居る。仰げば月の光は冴え冴えて、移り行く旧都を見守るが如く伏せば街路樹は真黒の蔭をアスファルトに投じて居る。古、幾多の大宮人があの月にあはれを感じ、興を起して或は歌を詠じ或は詩を吟じて楽しんだ事であらう。

更け行く夜の京都市にはまだ多くの学生が徘徊を続けて居る。我等一行は又明日の労に備へんが為、安らかな夢に入つた。」

松井は「旅行記余聞」で、橋爪の人物描写の妙について次のように評しています。

「……。さらに人物を配して文章は立体的となり、動的となって行く。松岡君、香取君らと同乗してのボート遊び、松岡君が裸で川に飛び込んで亀をつかまえたり、駅前のベンチで巨漢坂入パイ先生が派手な居眠りをしているところを七、八十人の女学生に面白がられるあたりは、読んでいて思わず頬がほころんでくる。特に感服したのは、このあまり長くない一文の中に、引率の四人の先生方を全部出していることである。坂入先生は前述のところで『我等生徒の欽慕に堪えぬ先生である。』と出し、居眠りから覚めた先生がまわりにいる生徒が他校の生徒だったのを知って、目をキョロつかせているので、『嵐の山の停車場はゆるがんばかり、遠藤先生も隅の方で笑って居られた。』というところで遠藤先生。東本願寺の毛綱を見て、『毛よりも軽しと言うが之こそ本当に毛よりも軽いな。』と片岡先生が笑われた。

以上、三人の先生方は実名で出ているが残るお一人の平塚ゴ【美治　体育「ゴ」は渾名のゴリ、ゴリラの略】先生は、絵葉書屋、『丈の高い色の〇い〇〇い洋服を着た先生……?』とあまり気持ちのよくない事で現れる。……。」

女学生たちのとんだ笑い物になってしまった坂入要之介先生ですが、引率、それも悪童連を率いての旅行が第6日ともなれば、お疲れも相当なものだったのでしょう。お気の毒としか言いようがありません。「イヤー、ウソーツ、ウヲー」といった女学生たちの言動は今も昔を変わりがありません。

橋爪は、

「……。更け行く夜の京都市にはまだ多くの学生が徘徊を続けて居る。我等一行は又明日の労に備へんが為、安らかな夢に入つた。」

と結んでいますが、松井によれば、安らかどころではなかった人たちが大勢いたようです。

先生方の目を盗んで、同宿となっていた旭川高等女学校の生徒たちの部屋を訪れたところ、大騒ぎをされ、階段を転げ落ちる者がいたり(町中を並んで歩いたり、手紙のやり取りをしただけで、処分の対象、悪くすると退学にまでなる時代ですから、女学生たちが驚くのは無理もありません。)、熟睡中に悪戯をされて、朝方目が覚めると、あまりの痛さに泣き出すという気の毒な生徒がいたり、と東山三十六峰に剣戟(けんげき　つるぎとほこ。刀剣。刀で斬り合う戦い)の響きどころか、土中生たちの叫びが轟いていたのです。

(注1)**引き舟**
1606[慶長11]年、京都の豪商角倉了以(すみのくらりょうい)の開削により、保津川の舟運が始まって以来、1948[昭和23]年にトラック輸送に切り替わるまで、保津川を下った船は綱を引っ張って船頭たちの人力だけで亀岡まで回航されていた。

(注2)**大悲閣**
角倉了以が、保津川(大堰川)を開削する工事で亡くなった人々を弔うために、京都嵐山の中腹に建立した観音堂。1614[慶長19]年の造立。源信作といわれる千手観音菩薩を本尊としている。寺号は千光寺。

(注3)**大殿堂**
御影堂(ごえいどう)と阿弥陀堂(本堂)。
御影堂(国宝)は、1636[寛永13]年再建、2009[平成21]年大修復。東西48m、南北62m、高さ29m。中央に親鸞聖人の木像、両脇に本願寺歴代宗主の影像を安置している。
阿弥陀堂(国宝)は、1760[宝暦10]年再建、1985[昭和60]年修復。東西42m、南北45m、高さ25m。中央に阿弥陀如来の木像、両脇に龍樹菩薩・天親菩薩・曇鸞大師・道綽禅師・善導大師・源信和尚の6師の、両余間に法然聖人と聖徳太子の影像を安置している。

(注4)**大師堂**
御影堂(ごえいどう　重要文化財)。1864[元治元]年の禁門の変(蛤御門の変)による焼失の後、1895[明治28]年に再建、2011[平成23]年修復。正面76m、側面58m、高さ38m。堂内の正面中央に宗祖親鸞聖人の御真影(ごしんねい　お姿をそのまま写して作られた木像)が安置されており、左右には第8代蓮如上人の御影や歴代門首の御影が掛けられている。内陣・外陣に敷かれた畳をあわせると927畳にも及ぶ。

(注5)**毛よりも軽しと言ふが之こそ本当に毛よりも軽いな。**
諺の「死は或いは泰山より重く或いは鴻毛より軽し」を踏まえた言葉。諺の典拠は、司馬遷「任少卿に報ずるの書」の「人固(もと)より一死あり、死は或いは泰山よりも重く、或いは鴻毛よりも軽きは、用の趨く(おもむく)所の異なればなり」とされる。
毛綱とは、人毛と麻で作られた巨大な綱。当時使用されていた麻縄では、巨大な梁や柱となる木材を引っ張る際に切れてしまい、大きな事故に繋がることがあった。そのため、全国の女性信者が髪の毛を寄付し、より丈夫な縄を作ることとなった。大きいものでは、長さ110m、太さ40cm、重さは約1トンにもなったものもある。
片岡先生は毛綱を見て、諺の「鴻毛より軽し」を思い出し、感歎の余り、微笑まれたと思われる。

(高21回　松井泰寿)